

「幼小いっしょに！のとまり会」

1 趣 旨

- ・年長児と小学1・2年生が親元を離れ、自分の力で生活する場を提供する。これにより、一人ひとりが自分のできることを積み上げて体験の幅を広げるとともに、子どもの自己肯定感を高める。また、年長児と小学1・2年生が共に活動するプログラムを精査し「小1プロブレム」に寄与する。
- ・保護者にとっては、子育てについて学んだり、保護者同士が情報交換を行ったりすることにより、子育てについて自信をもつ機会とする。また、保護者同士のつながりを構築する場とする。



2 ねらい

- ・異年齢集団による生活体験活動をとおして、低年齢期の子どもたちが体験活動の楽しさを感じるとともに、集団行動や人とのかかわり方のルール等に気付く。
- ・保護者が活動をとおして学び、自らの子育てについて振り返る。また、保護者同士がかかわりを持ち、子育てに対して思いを深める。

3 日 程

- (1) 期 日 第1回 平成 25 年 9 月 8 日 (土) 日帰り
 第2回 平成 25 年 9 月 14 日 (土) ～15 日 (日) 1泊2日
 第3回 平成 25 年 10 月 5 日 (土) ～6 日 (日) 1泊2日
- (2) 参加者 第1回 62名 (子ども31名, 保護者他31名) ※募集子ども40名とその保護者
 第2回 76名 (子ども41名, 保護者他35名) ※募集子ども40名とその保護者
 第3回 66名 (子ども31名, 保護者他35名) ※募集子ども40名とその保護者
- (3) 研修内容及び講師

(○…子どもプログラム, ◎…親子プログラム, □…親プログラム)

第1回(日帰り)	第2回(テント1泊2日)	第3回(県立施設連携1泊2日)
【午前】 ○館内探検 □トークセッション 講師:沼田直子氏 (南加賀保健福祉センター所長)		
◎カートンドック作り 【午後】 ◎ホットケーキ作り (デザイン対決) ○振り返り	【午後】 ○テント設営 ○砂像作り ○夕食, 入浴 ○テント泊	【午前】 ○後片付け ○朝食 ○清掃 ◎ピザ作り 【午後】 ◎ピザパーティー ○振り返り
【午前】 ○テント撤収 ○朝食 ◎館内テーリング ◎おやつ (マシュマロ焼き) ◎昼食 【午後】 ○振り返り	【午後】 ○秋みつけ ○丸木細工 ○寝床作り ○夕食, 入浴	



保護者同士の交流



カートンドック作り



ホットケーキ



海岸での砂遊び

4 成果と課題

(1) 成果

事業評価を目的とし、参加者(子ども)のべ103名、参加者(保護者)のべ101名を対象に調査を実施した。年長児の調査に際しては、ボランティアスタッフの聞き取りによって回答した。

①参加者の評価（アンケートより）

- 事業全体の満足度が全て9割以上（第1回97%、第2回98%、第3回97%）であった。
- プログラムごとの調査においてもほぼ満足度が9割以上であった。（ホットケーキ作りデザイン対決のみ87%）中でも、カートンドック（100%）と館内テーリング（97%）が群を抜いて満足度が高かった。
- 一番楽しかったこと・頑張ったことの記述から、それぞれの傾向をつかむことができた。

小学生	1番楽しかったプログラム:館内探検, テント泊, 秋見付け, 丸木細工
	1番頑張ったプログラム:カートンドック, ホットケーキデザイン対決, テント設営, ピザ作り
年長児	1番楽しかったプログラム:館内探検, ホットケーキデザイン対決, 海岸で砂遊び, テント泊 なかよくなる遊び, 秋見付け, ピザ作り
	1番頑張ったプログラム:館内探検, ホットケーキデザイン対決, テント設営, ピザ作り

②保護者の評価（アンケートより）

- 全ての回において、事業全体の満足度が100%であった。
- 第1回の親プログラム「子育てトークセッション」では、講師の話はもとより、親同士の話し合いが充実していた。参加保護者からは、「もっと時間がほしかった。」という声が多数あがった。
- ボランティアに対する保護者の評価も全ての回で9割以上の満足度（第1回90%、第2回100%、第3回96%）を得た。子どもの支援体制の充実を図るため、ボランティア（15～17名）を多数配置し班付スタッフとして活用する場を設けた成果の一つであると考えられる。

○感想より

- ・年代の違う子ども同士で、協力し合って何かをやり遂げることが良かったです。
- ・そばにいと、つつい世話を焼いてしまうのですが、今回、見守るということで、意外に自分でちゃんとできるんだなと思いました。今後も、できるだけ手を出さずに見守るということをしていきたいです。
- ・知らない大人同士でクッキングをとおして交流できたこと、人の子育て、その悩みを聞くことができたことが自分のこれからの”力”になりました。

③考察

- ・低年齢期の子どもにとって「頑張った」と感じられる活動を多く設定することができた。これにより、小学生と年長児が力を合わせて取り組み、最後まで成し遂げようとする姿が多く見られた。
- ・各班を縦割りで編成するだけでなく、小学生と年長児のペアを基本に編成した。これにより、自分のペアのお世話をする小学生、小学生の言うことを聞く年長児の姿が見られた。
- ・保護者同士がかかわれるようにプログラムを配慮した。（トークセッション、クッキングなど）これにより、保護者同士のつながりを構築することができた。

(2) 課題

- ・4年目の継続事業である。「発達段階に応じた体験活動」の効果や留意点について整理する。
- ・第3回は、県立施設職員との連携がスムーズになり、子どもの成長にとって効果的な活動が実施できている。今後は、プログラム開発に取り組む等の「一歩進んだ連携のあり方」を検討する。
- ・毎年、幼児教育系学生をボランティアとして多数配置し、学生にとっても有意義な学びの場となっている。大学との連携を一層深め、学生の力量アップの場として位置付けていく。